

# 天文学とプラネタリウム

第89回



今月のお題

## 国立極地研究所公開日レポート



天プラ Twitter @tenpla 好評更新中。

時には天文学以外の研究所も見てみたい。  
暑い夏に寒い極地の話題で楽しんできました。



www.tenpla.net

高梨直紘 (東京大学)  
平松正顕 (国立天文台ALMA推進室)

天文学の強みは、誰でも空を見上げればその対象を目にすることができること。一方で弱みは、手が届かなくて(コンピュータシミュレーションを除いて)実験ができないこと。筆者が関わっているような地球の裏側の電波望遠鏡(ALMA プロジェクト)なんか、望遠鏡はるかかなたにある上に電波望遠鏡ということで、天文台の公開日などでポスター展示しかできず、その面白さを伝えるのは一苦労です。では、天文学以外の研究所は公開日にどんな企画をやっているのか。そんなことを思いながら、7月に行われた国立極地研究所の一般公開に行ってきました。こちらも対象は極地、はるか彼方です。(実は極地研の隣にある国立国語研究所も同じ日が公開日でした。これはこれでどんな企画があるのか気になるところ。)

研究所のロビーには、南極から持ち帰ってきた氷、何種ものペンギンの剥製、そして南極で拾ってきた隕石や化石。これらは定番ですね。そしてその横には、低温化でも放射線を浴びせても死なないという驚異の生命力をもつクマムシを顕微鏡で見るコーナー。極限環境生物、と

いう扱いでしょうか。多くの家族連れが、南極の水や顕微鏡に触れて楽しんでいるようでした。

研究棟横には「日本南極地域観測隊」と書かれたコンテナが無造作に置かれ、隣のガレージには雪上車やスノーモービル、さらに極地探検で実際に使われたテント、食器、簡易トイレに風力・太陽光発電機などが展示されていました。傍らに立つ説明員さんは「南極観測隊経験者」「専門：気象観測」等と書かれたバッジをつけていて、質問しやすいと同時にとっても頼りになります。「最近のテントは軽いけどもろい」「外はとんでもなく寒いけどテントの中で湯を沸かすとそのまわりだけは暖かい」極限環境に行った人だからこそ出てくる言葉が参加者の心に響きます。

研究棟内ではサイエンスカフェや工作ワークショップなども行われていましたが、ハイライトはやっぱり南極昭和基地との生中継でしょう。基地内のいろんな部屋からの中継、越冬隊長や観測隊員、料理人まで含めた多くの人のインタビュー、そして会場からの質問に合わせてその専門家が入れ代わり立ち代わり出てきて解説。「オーロラ観測でどんなことがわかるの?」



会場に置かれていた雪上車。特殊プラスチック製で、万一氷が割れて海に落ちてしまっても沈まない構造になっているそうです。

「好きなメニューは何?」など多岐にわたる質問に、テンションの(異常なほど!)高い越冬隊の人たちが何人もノリノリで質問に答える姿も見られ、何とも豪華なイベントでした。現地は遠くとも、同じ空気を共有できる。極低温の厳しい環境を潜り抜けてきたテントや雪上車、ライブ中継、そして何より極地を経験した人たちが、そのことを示してくれているようでした。